

## 先天性心疾患術後の突然死— 12例の検討

加藤 裕久, 豊田 温, 井上 治

**要約:** 先天性心疾患術後遠隔期の突然死について検討した。対象は1968年以降に開心術を施行した2227例のうち突然死した12例である。基礎心疾患はファロー四徴、大血管転位などチアノーゼ型の重症心疾患が多かった。死因の多くは不整脈と思われた。突然死は、運動中だけでなく日常の生活中にも起こっており、運動管理のみでは防ぎきれない。今後、手術方法の改善、術後不整脈に対する対策が特に重要と考える。

**見出し語:** 突然死、先天性心疾患、術後不整脈

**目的:** 先天性心疾患術後の突然死の検討を行う。

**対象:** 久留米大学病院で、1968年以降に開心術を行った2227例の先天性心疾患のうち、術後に突然死をした12例を対象とした。

**結果:** 手術年齢は1~14歳(平均6歳)、死亡年齢は2~17歳(平均9歳)であった。手術から死亡するまでの期間は、5年以上3例、1~5年3例、1年以内6例であった。

基礎心疾患は、ファロー四徴7例、大血管転位2例、修正大血管転位1例、心室中隔欠損兼僧帽弁閉鎖不全1例、心内膜床欠損1例であった。

死亡時の状況であるが、マラソンやバスケットボールなどの運動中や学校から帰宅後、自宅庭で遊んでいた等、運動が関与していた場合が4例、学校の授業中1例、入院中や外来診察を待っていた時等が3例で、感染に起因するものが3例であった。

死因として予想されるものに、不整脈7例、感染やDIC3例、心不全1例、弁機能不全1例であった。

術後に不整脈を指摘していたのは4例であった。(心室性期外収縮3例、一過性完全房室ブロック1例、心房粗動1例)。

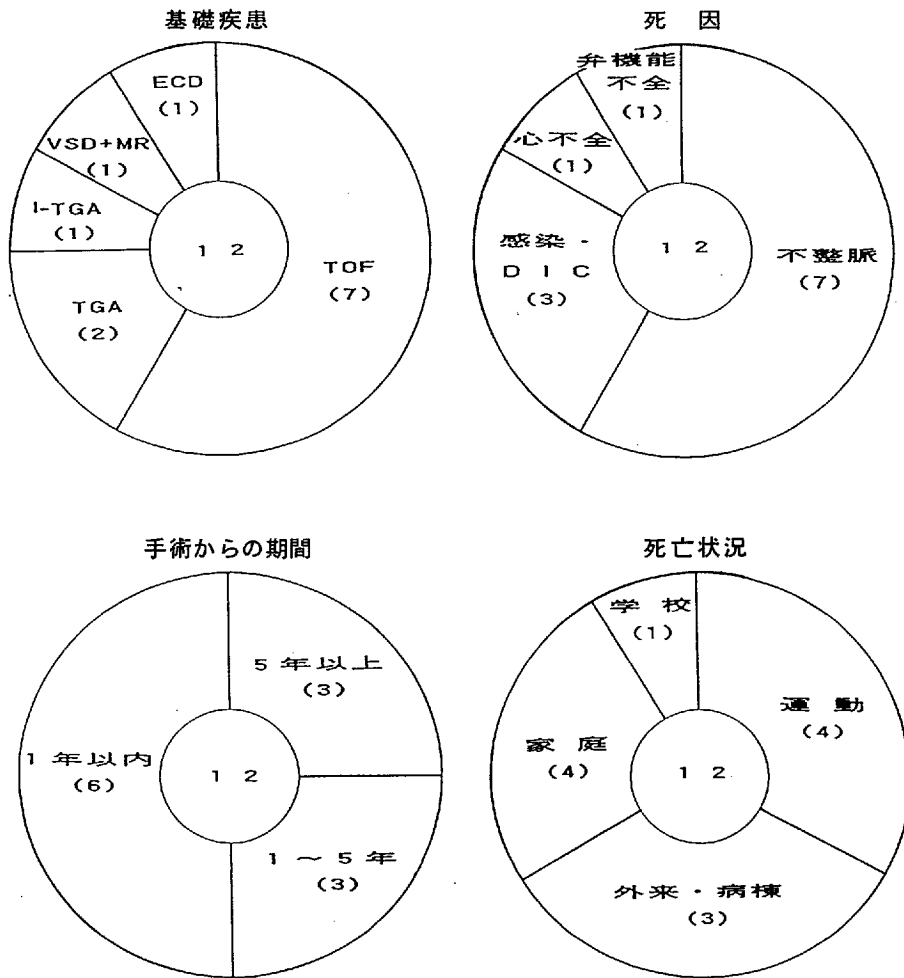
---

久留米大学小児科 (Dept. of Pediatr., Kurume Univ.)

まとめ：(1)術後の突然死の基礎心疾患は、チアノーゼ型の重症心疾患に多かった。  
 (2)死因の多くは、不整脈と思われた。  
 (3)術後の突然死は、運動中のみならず、日常生活中でも起こっており、運動管理のみでは突然死は

防ぎきれない。  
 (4)術後の問題点と今後の課題；①手術方法とその質の向上、②術後不整脈の評価、抗不整脈薬の効果と使用法の検討、③基礎心疾患及び手術に伴う心筋病変の検討。

図 先天性心疾患術後の突然死 (N = 12/2227)





**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:先天性心疾患術後遠隔期の突然死について検討した。対象は1968年以降に開心術を施行した2227例のうち突然死した12例である。基礎心疾患はファロー四徴、大血管転位などチアノーゼ型の重症心疾患が多かった。死因の多くは不整脈と思われた。突然死は、運動中だけでなく日常の生活中にも起こっており、運動管理のみでは防ぎきれない。今後、手術方法の改善、術後不整脈に対する対策が特に重要と考える。